

## 現代美術・・・現代アートの潮流？ 改めて、芸術・美術・アートって何？

### そもそも美術家とは何者なのか

本稿のテーマ「現代社会における・アートの在り方と見方」のなかで、特に私が注目しているのは、日々変化している既存作家を取り巻く社会動向と、その全てを基本的には受動する側である一般市民、それぞれの関わり方に注目しています。

これまで、主に“肯定されている多くの芸術作品・美術作品について、その楽しみ方と接し方についてのポイント（私見）”に触れました。以降では“作り出す側と見る側”、双方の環境を含め、推考したいと思います。

美術家とは何者か・・・私達は多くの専門家の評論、画家達のノート、文化財としての個々の作品からも、時代の問題や課題、風習や社会状況などを推し量ることができます。そこから見えてくるものは、・・・結論を先に申し上げますと**美術家は「時代の翻訳・演出者であり予言者」**であると私は考えています。

この場合、画家等のカテゴリはあまり関係ありません。メッセージとしての、作品のポテンシャル（メッセージ力）が重要になります。このポテンシャルを左右する最大要因は、美術家が存在する「**場**」環境です。

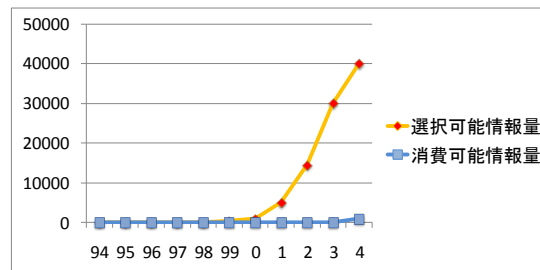
なぜならば、彼らが発信する作品は彼らの思考を経由した「情報変換物」であり、純粋な「情報の集積物」と考えられるからです。ここでの疑問は、彼ら（私達）が時世から得る情報のあり方、更にその入手方法の違いにより、情報そのものに差異は発生しないのでしょうか？そしてそれを正しく理解し、バラツキ無く作品に情報を埋め込んでいるのでしょうか？

つまり、IT技術の発展により目覚ましい変動を繰り返す現代社会にあって、美術家は現代社会からどのような影響を受けており、何を発信しているのか。個人的に、“日本の多くの美術家に「本質的なテーマ」見えない”と感じてから十数年が経過しました。その起点は2000年を数年経た、バブル崩壊後のことです。

今日の私達は、1日あたり実に膨大な数の文字・画像・映像・音声などの情報を受け取っています。ある推計によると「現代人の1日の情報量」は、「18世紀の農民の一生分」との例えもあります。さらに、ビックデータが注目された昨今、クラウド型のサーバーに集約されるデータまで換算すると、私たちを取り巻く情報は、天文学的数字さえも凌駕しそうです。

図（\*）は少し前のデータですが、日本人が年間に消費可能な情報の総量（1994年を100とした時の、電気通信系、輸送系、空間系の総和）をグラフにしたものです。興味深いことは、ネットが日本でも市民権を得た“2000年”を境に消費可能情報（各メディアを通じて、1年間に実際に受け取り消費した情報の総量）の量を遥かに上回る選択可能情報（各メディアの情報受信点において、1年間に情報消費者が選択可能なかたちで提供された情報の総量）が倍々で増加していることです。統計の2年後、平成18年の公表数字を見ると、選択可能情報は50000を上回り、この年から消費可能情報も実際の消費数字を上回る量となっています。現在、選択可能情報と消費可能情報は双方とも、年々微増を続けています。

他の例ですが、日本の総合印刷会社が受注する印刷物の原稿がやはり2000年を境に、デジタル原稿量がアナログ原稿量を凌駕しました。2005年頃には、特殊なもの以外すべての原稿がデジタルとなっています。同時に扱うデータ量が倍増しています。



（\*）出典：総務省「2006年度情報流通センサス報告書」

つまり、現代人は間違いなく膨大な情報の渦中に暮らし、それぞれ年齢や職業、地域環境に関わらずその膨大な情報の中から個々に必要なものを選択、あるいは無意識に情報の受発信を続けているのです。

このような状況下で今日の美術家すべてが、社会に対して、自身の思想や体験から成る提言を正確に、また合理的に発することは難しいのではないか、という疑問が生じてきます。

いわゆる情報リテラシーが美術家に必要なことは言うまでもありませんが、リテラシーのようなテクニックを得る前に、創作に対するグランドデザインを得る必要があると考えます。国家でいえば政府方針であり、企業であれば営業戦略です。いわば創作の芯にあたるもの、ここで考えたいキーワードは「文化」と「アイデンティティ」です。

サミュエル・ハンチントン（1927年ニューヨーク生まれ、ハーバード大学政治教授、アメリカを代表する戦略論の専門家）は『文明の衝突』のなかで、近代の世界は文化的背景を基に、政治的な

グループを形成していると論じています。彼が唱える“文化”とは、いくつかの地域社会における言語、歴史、宗教、生活習慣、社会制度などの共通する客観的要素が集合したもので、それらを支えるものは、人々の主観的自己認識（アイデンティティ）であると説いています。また、関連する地域文化の集合が“文明”であると定義しています。

歴史的に文化基盤を同じにする民族同士はお互いの勢力的バランス、均衡を取ることができるが、異なる文化基盤を持つ民族同士は均衡を取ることが難しい、と論じています。近年の日本に降りかかる領土問題にも、その構造は見て取れます。そして、近代のアメリカとイギリスの政治的連携や、EUにおけるフランスとドイツ、さらには中東や中国そしてロシアの動向にも現れています。

ぐっと身近なところで、今皆さんが住んでいる地域、あるいは故郷を思い出してください。ある人が居住する地域で、「言語、歴史、宗教、生活習慣、社会制度などの共通する客観的要素」の枠の中からはみ出した場合、トラブルが発生する可能性は高いと思います。

そのような美術家をイメージして想像すると・・・ある地域社会で、その地域社会の文化に根ざした、発想、創作による造詣は地元地域に理解されやすいが、文化の異なる地域では拒絶される・・・しかし、異なる文化圏ではその異文化を受容し自身の文化との共通性を表現できれば、その造詣は受け入れられる・・・この想像は、極端な例でしょうか、一般的に有り得ることでしょうか？グローバル社会と言われて久しい今日では、もはや滑稽な考え方でしょうか？

ここで重要なことは、確かに美術作品ひとつ一つは、物理的にも個々のオリジナルです。そして作品に意思があるのならば、それは作家の意思です。そして、その作家が育った、家庭、地域、国家の影響は目に見えませんが、作家のアイデンティティこそが、作品形成の重要ファクターであるということです。これにより、膨大な情報（意志・思想）が作品に付加されているのです。

故に、美術家が提示する作品等があらゆるメディアや手段を活用し、それこそ全世界に発信される現在、今一度その作品の発表の仕方と異境での受け入れ方について、作家やその関係者は、その影響力を想定する必要があると考えます。

それでは受容する側の私達は、どうすればよいのか？何に注意を払えばよいのでしょうか？

それは、先に触れた「感性の循環」です。私達が美術家等の作品に対して感じたことを作家に素直に返す、伝えるということを通じ、作品に込めたメッセージの意味と、その質的向上を美術家に強く意識させることです。

もちろん自ら他者のメッセージに刺激を受け、それを受容し、自ら変革をつづける美術家等は多

くおりますが、自己中心的な変革もまた多く見受けられます。ほとんどの美術家は、後者に属していると思います。

感性の循環は、感性の「スパイラルアップ」とも換言できます。創作行為そのものを竜巻きが上昇するように改善・改良し向上させるイメージで、企業活動などの改善・改革に取り入れられている手法です。

一見同じところをぐるぐる回っているような変化でも、幾度となく他者からの刺激を受けること（現状を理解し問題を解決すること）で自ら成長し、徐々に上昇していくイメージです。感性の循環を実践することで、作家等のプライドや創作意欲を損なう可能性も否定しませんが、人間形成の視点からも実践してみる価値はあると考えています。

特に大学や専門機関だけではなく、初等教育から「感性の循環」を取り入れたカリキュラムを実行すれば情報受発信の質的バラツキは防げると考えます。欧米では自然に行われている手法ですが、私達日本人はここを意識し、しっかりと実施する必要があるのです。